ロンドン大学・サンガー研究所訪問記

大学院生　藤井　宏

このたび、有吉教授に同行して渡英する機会を得ましたので、報告したいと思います。私は現在、中部ベトナム・ニャチャンの小児から分離された薬剤耐性肺炎球菌に関する研究を行っています。肺炎球菌ゲノムの研究に関して次々と重要な論文を世に送り出しているサンガー研究所を訪れ、ゲノム解析（バイオインフォーマティクス）の教えを請い、研究協力の提案を行う一貫として、自分の研究のプレゼンをするということが、今回一番の課題でした。

今回のプレゼンにあたって、渡航前にクリス・ペリー教授が 2 時間程度時間を割いていただき、スライド原稿の手直しをしていただいたのですが、有吉教授の熱血指導が早くも福岡空港へのバスの中から始まりました。「乗り継ぎのときにチェックするから、グラフ作ってみて。」と言われ、機内で苦労しながら作業していました。ホテルに着く前に、近くの簡易レストランで食事をとったのですが、その時にもディスカッションがありました。それまでの原稿に論理の曖昧さが残っており、混雑するロンドンの地下鉄内で教授自ら作業していただいたようで、新しいスライドが付け加わっておりました。

翌日は、ホテルにこもってのスライドの手直し、プレゼンの練習で終始しました。クリス教授とともに作成した原稿とは、ほとんど違うスライドになったので、クリス教授に一言断りのメールを送りました。

9 月 21 日に、サンガー研究所を訪問しました。研究所は、ロンドンから電車で 1 時間くらいのケンブリッジの郊外にあり、ケンブリッジ駅からも車で 20 分ほどかかりました。朝、ロンドンのキングスクロス駅近くの大英図書館の近くを通っているとき、有吉教授の曽祖父にあたる人がロンドン万博の際、宮大工として渡英し、しばらく英国に住んでおられたらしく、その痕跡を見つけるため、図書館に通ったエピソードを話されました。

サンガー研究所では、昼食をとりながらのディスカッションのあと、Stephen D Bentley 教授に研究所をざっと案内していただきました。案内していただいた部屋だけ見ても、次世代シーケンサーが何十台も設置されており、圧倒される光景でした。本題のプレゼンですが、吉田レイミント先生からベトナム・ニャチャンのおける小児呼吸器感染症症例の継続的な鼻腔検体採取、ウイルス感染モニターと患者背景データの蓄積、健常者コントロールからの検体採取など、質が保証され、十分なボリュームのある検体を提供できることが紹介されました。自分のプレゼンはつたないものでしたが、有吉教授のアシスト、先のベトナムの研究の紹介、日本の肺炎研究サンプルの紹介もあり、将来的な共同研究を視野に入れて、建設的な議論ができたのではないかと思います。さらに、バイオインフォーマティクスの学習のための留学の可能性も非常に現実的となりました。

22 日は、少しフリーな時間をいただいたので、パディントン駅近くにあるセントメアリー病院に行ってきました。薬剤耐性肺炎球菌研究で、とくに β-ラクタム薬耐性がテーマの中心なので、フレミングがペニシリンを発見した場所にぜひとも行ってみたかったのです。有吉教授が HIV 研究で 2 年ほど過ごした場所でもあるようです。あいにく病院内のフレミング博物館の開館時間を過ぎており、外壁のモニュメントだけ写真撮影しました。観光客の多い中心部に比べ喫煙者が多いことが、病院のある地区の第一印象で、英国も日本も問題点は同じと感じました。

23 日は、ロンドン大学を訪問し、ロンドン・長崎パートナーシップのシンポジウムに参加しました。長崎大学からは、有吉教授のほか、平山教授、橋爪教授、吉田レイミント先生、クリス・ペリー教授、シャロン・コックス教授のプレゼンがありました。ロンドン大学と長崎大学の関係が、個別のコラボレーションの 1 つではなく、ともに世界の健康問題を解決していくためのパートナーシップであることが強調され、まさにそう感じました。日本の製薬メーカーの研究開発における潜在力、研究のための日本の基金、先進テクノロジー、長崎大学がもつベトナムやフィリピンなどの研究拠点など、日本側のメリットをロンドン側がうまく活用することで、相乗効果が得られるのだという内容がとてもよく理解でき、この 10 月のグローバルヘルス校の開校もあり、一学生としてこれからのパートナーシップの発展が楽しみです。David Prieto 先生が、長崎大学で 2 週間の疫学統計ショートコースで教えられたときの印象を語られ、日英の講義スタイルの違い（学生が当初、あまり議論に乗ってこなかったこと、グループワークを行い、最後にはよいフィードバックが得られたこと）、今後の講義のあり方について述べられました。

LONDON SCHOOL OF HYGIEN
AND TROPICAL MEDICINE

LONDON
SCHOOL of
HYGIENE
&TROPICAL
MEDICINE

Rugby World Cup 2015
Africa 32-34 Japan

午後からは UCL 病院の感染症病棟で行われた画像カンファレンスに参加しました。また、ロンドン大学のジョン・スノーホール（19 世紀のロンドンで大流行したコレラの原因をポンプ井戸であると特定した医師にちなんだホール）で、Joy Lawn 教授の講演を聴講しました。Lawn 教授は、自らがウガンダの病院で帝王切開の後、生まれた生い立ちを話され、途上国で新生児死亡・死産を減らすために精力的に活動されていることを自らのデータを示しながら、講演されました。

ロンドン滞在最終日の 24 日は、同じジョン・スノーホールで Liz Corbett 教授の講演を聴講しました。Corbett 教授の研究テーマは、HIV 蔓延地域における結核のコントロールに関するもので、HIV の自己検査にも言及されました。

以上、短いながらも充実した 1 週間を過ごしました。サンガー研究所でのプレゼンは、ほとんど手取り足とりで行ったものでしたが、何とか自分の役割は果たせたのではないかと考えます。連携の輪は今後も国内外にどんどん広がっていくと思います。とくに若手の皆様、この輪に加わってみませんか？